

現代国際社会における競争と協力問題に関する一考

国際東アジア研究センター 上級研究員 韓 成一

様々な事件や災害の多かった平成23年もわずかな日にちだけを残している。人類と地球環境を巡る大事件や自然災害が多発している昨今であるが、この一年間は実にたくさんの出来事があったと振り返られる。

3月11日に発生し、日本の全国民を悲しみと恐怖に陥らせた東日本大震災と、それに起因した全国規模のパニック状態……。大勢の人々が一瞬で大切な家族と財産をなくし、未だにその後遺症で苦しんでいる。日本各地に及んだ膨大な経済的損失はもちろんのこと、政界においても日本のための真のリーダーシップが何であるかについて深く考えざるを得ない状況にまでなっている。国際政治界でも激変の一年であった。独裁政権の代名詞とも言えるリビアのカダフィ大佐が10月に、北朝鮮の金正日総書記が12月に死亡した。また、全世界をテロの恐怖に巻き込んでいたビンラディンも射殺されたという報道もあった。長年続いたイラク戦争も終結をむかえ、派兵されていた米軍の完全撤退が今年中に完了されるという。経済分野においても世界的に厳しい状況が続いている。日本経済は円高による苦戦が継続している。国際経済と貿易面では、既存の経済強国の低迷によるリーダーシップ弱化が目立っており、中国をはじめとする新興経済勢力の躍進が凄まじいものになっている。全世界全分野における既存の体系が根本的かつ総合的に激変していることがよく分かる。

このような激変の渦の中を生きている現代人類は、各自の置かれている立場は異なるものの、これらの変化や今後の動きに順応し対処していく問題意識面では一致しているであろう。現状に安住すれば、競争に負けて淘汰されてしまうのである。また、ここ数十年間益々エスカレートしてきた地球環境の異様な急変に対し、人類は一抹の危機感をおぼえざるを得なくなった。人類と地球の健康な未来のために、みんなが協力して努力すべき使命感まで要求されるようになった訳である。要するに、いまの全世界には「競争」と「協力」の共存の意義が益々高まってきている。一体、これからの私たちは何をどう目指すべきであって、どのように頑張るべきであろうか。

かつて世界人類は、資本主義と社会主義と大別される2つの理念体系の下で対立しながら共存してきた。しかし時代は一変し、イデオロギーの違いによる敵と味方の区別は既に薄れてきている。自国が生き残るためならば、誰とでも手を組むことも背を向けることもあり得る時代になったのである。その結果型の1つとして、世界各地域に導入されている「共同体」の概念が挙げられるが、まだたくさんの課題を残している現状でもある。未来志向的に意味のある共同体として存続、発展させるためには、必ず世界人類の抱えている問題とその解決策、進んでは理想的な姿について十分な検討と協議を行う必要がある。地球環境保全を大前提とする各共同体間の真の協力に基づいた真の競争が切実であると考えている。